
青いカラフル

菅井翔太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青いカラフル

【Nコード】

N1122H

【作者名】

菅井翔太郎

【あらすじ】

「お前がいると落ち着くんだよ。何もなくていいから、ここにいろよ。いいだろ?」「…うん。」

第一話

「ユキとのぼる」

「ユキ、ご飯…」

ドアの向こうからのぼるの音がする。もうそんな時間か。

「ちよつと待ってる。今作るから」と声をかけるとのそのそと自室に引き上げていく足音が聞こえた。足取りから随分空腹なのがうかがえる。

「さてと…」

切りのいいところまで仕事を片づけてしまいたかったが、これ以上放っておくと冷蔵庫を荒らされかねないので仕方なく夕飯の準備に取りかかることにした。

部屋と出るとすぐにのぼるの部屋のドアが開いた。

「これから作るから」

「…」

のぼるはのそのそリビングへ移動。ソファーにどつかと腰を下ろすとそのまま動かなくなった。そんなに腹減ってるのか…

のぼるは普段あまりしゃべらない。声の出し方を忘れてしまったかの様にいつも無表情のような、ほほえんでいるような、あるいはどちらともつかないような顔でじっとしている。あるいは絵を描いている。あるいは俺を見つめている。

ヤツの表情の微妙な変化に始めは気付くことが出来ず戸惑うこともあったが、最近ではヤツの行動からおおよその見当はつくようになった。

そう言えば、あれからもう3年になるんだな…

「チャーハンを作った。早く食べたいだろ？」

「…うん。」

「素直でよろしい」

のぼるは食うのが早い。俺が半分も食べ終えないうちに平らげ、

「…おかわり。」と皿を突き出す。

俺が食べ終えるまでに3杯食ったのぼるは「…ごちそうさま。」

とつぶやいて皿を持って流しに向かう。

ここまで来るのに半年、皿を割らずに洗えるようになるまでもう半年かかった。

ふとそんな事を思い出しながら食後の一服を…

「…」

のぼるがこつちを振り返る。いつもの表情のまま。

「わかったよ。ベランダで吸うよ…」

のぼるはタバコのおいが嫌いだ。という事に気がつくのに2年かかった。

「今日も、おいしかった…」

洗い物を終えてのぼるがベランダに出てきた。

どんなに適当に作っても、どんなに丹誠こめて作っても、のぼるは同じ調子で同じ言葉をかけてくる。

でも、同じように見えて毎日少しずつ違う。という事を俺は知っている。今日のは「中の上」といった所かな。ちなみに「中の中」以下の評価だった場合は次の日にごちそうを作ると決めている。これは俺の中で勝手に決めたルール。

「仕事は…終わったのか。」

のぼるはヤツになれていない人には独り言にしか聞こえないような声でつぶやく。

しかし、のぼるは基本的に独り言を言わない。のぼるが声を出すのは他人に意志を伝えたいときのみだ。

「いや、まだ少し残ってる。今日中にはなんとかしたいんだけどなあ……」

「そうか……」

のぼるがあらさまに残念そうだ。

その訳は……ご想像にお任せしよう。

「まあ、あと2、3時間ってとこだ。お前はそれまでに風呂を沸かして酒を買ってくること。わかったかな？」

「……わかった。」

のそのそと風呂場へ向かうのぼるの足音が気持ち弾んで聞こえるのは気のせいではないだろう。

「素直でよろしい」

第二話

く美術館に行こう

目覚まし時計が鳴る一瞬前にのぼるはムクッと起きあがった。

次の瞬間目覚まし時計が鳴って、その次の瞬間にはのぼるの手によって止められていた。

「…朝だ。」

「うん…」

「…起きよう。」

「うん…」

俺は朝が弱い。

普段から夜型の生活をしている性もあるが、今日はそれだけが理由ではない。

その辺は…ご想像にお任せしよう。

「…約束。」

「わかってるよ…」

目をこすりこすり起きあがるとのぼるはすでに自室に戻って着替え始めていた。

脱ぎ散らかった衣類を拾いつつ自分も着替える。

今日のはのぼると美術館に行く約束をしていたのだ。

芸大時代の後輩の作品が展示されるとかなんとかでのぼるは随分テンションを上げていたが、他のヤツの事ではしゃぐのぼるに若干のいらだちを感じた自分が惨めだったのであまり思い出たくない記憶だ。

のぼるは芸大時代に出来た数少ない友人と未だによく連絡を取り合っているらしい。そう言えばそれ以外に友人らしい友人を紹介し

て貰ったことがないな。

「…はやく。」

のぼるが俺の部屋をのぞき込んで言う。ヤツにしては積極的なアプローチだ。

「わかってるって。まだ10時だろ？」

「…10時25分。」

細かい。

井の頭公園駅は休日ということもあって随分と人出があった。

「…はやく。」

切符の券売機の前でのぼるが振り返った。

「わかってるよ。」

のぼるは切符が買えない。というか機械にめっぼう弱い。現代社会に生きる若者としてあるまじき機械音痴なのぼるは電車の切符はおろかジュースの自販機にもうるたえるほどだ。

「…はやく。」

「せかすなって…」

そう言えば切符ってどうやって買ったっけ？

スイカのしかもオートチャージに慣らされた自分にとって、券売機で切符を買うのは実に久しぶりの行為なのであった。

「…お前もスイカ買ったら？」

「…ユキ、まだ6月だ。」

「…」

「…」

六本木駅の近くにある「なんとか近代美術館」には休日ということもあって随分と人出があった。

「…はやく。」

「そう焦るなって。絵は逃げないよ」

「…はくさんの絵、はやく観たい。」

ヤツにしては積極的なアプローチだ。

なんだかイライラしてきたぞ…いんな。このパターン。

普段は俺がじれったくなるほどゆっくりとしか歩かないのぼるが今日は一般人並の早さで進んでいく。あんなに早く動くアイツをベツドの上以外で観ることになるとは。

小さな絵だった。

葉書2枚分ほどの大きさの黒い紙が壁にかけてある。

黒い紙に見えたそれには膝を抱えてうつむく女性が描いてあった。のぼるはその前にいた。随分と長い間。

会場にはその絵の他にも大きくて迫力のある絵や彫刻が整然と並べられていたが、のぼるはその小さな絵の前にただ立ちつくしていた。

「…さびしい絵だ。」

「そうだな」

素直にそう思った。のぼるがどういった意味合いで「さびしい」という表現を使ったのかはわからない。でも、「さびしい」絵だった。

膝を抱えてうつむきながら、小さな紙の上に置き去りにされた女性。

「…行かないと」

「どこへ？」

「…はくさんに会いに行く。」

ヤツにしては積極的なアプローチだ。

聞くところに寄るとその「はくさん」は長野の山奥でひたすら絵を描いているらしい。そんな生活で生きているのだからうらやましいと思わなくもないが、俺にはやっぱり都会暮らしが似合っていると思う。

それはさておき、恐らくのぼるはこの絵を見て「はくさん」の心

の叫びを感じ取ったんだろう。

「気持ちわかるけど、お前金はどうするんだよ？」

「…」

ちよつと意地悪をしてしまった。

俺だったら交通費と宿泊費ぐらいは余裕で出してやれるにもかかわらず、アイツの性質上アイツはこうゆう理由で俺を頼れない。変なところで遠慮する悪い癖があるのだ。治せって言ってるのに。

しばらくのぼるは黙って考え込んでいた。俺がそろそろ「金の心配はするな」とかなんとか格好いいこと言ってやろうか、と思つてニマニマしていると、

「のぼる…」

と恐らくのぼるのつぶやきを聞き慣れている俺にしか聞き取れなかったであろう小さな声のぼるの名を呼んだ。

その瞬間、のぼるが今まで俺の前では見せたことのない様な俊敏な動作で振り返った。あんなに早い動き、ベッドの上でも見たことないぞ…

そこには髪のお化粧みたいな、夢の島の仙人が遊びに来たみたいなの、そんな変な、というか奇怪な、というか「人か？」と思わず疑ってしまうような風貌の何かがいた。

「…はくさん。」

いつもと変わらないトーンに聞こえるのぼるの声だったが、俺はその声に「激しい驚き」がこもっていることを感じた。

「…のぼる。」

のぼるとほぼ同じトーンで夢の島の仙人がつぶやく。美術館の中でそこだけが違う次元に切り離されてどんどん遠ざかっていく様な感覚に襲われた。

こいつ、のぼると同じ「におい」がする。

夢の島の仙人もとい、はくさんはのぼるを見ていた。
のぼるも夢の島の仙人もとい、はくさんを見ていた。

二人の距離およそ10メートル。

「もつと近づけよ」と俺が突っ込む余地のないほどに二人の間には二人の時間が流れてた。

ここで俺がどんな声をかけてもきつと二人には届かないのだろうとその瞬間思い知らされるようだった。

「くそっ、イライラする…」

どれくらいの時間が流れただろう。

それは5分ほどの様であり、5年ほどの様でもあったが、腕時計を見るとそれはほんの2分30秒ほどの時間だった。

「…はくさん、もう大丈夫なんだね。」

「…ああ、ありがとう、のぼる。」

夢の島の仙人は夢の島へ帰っていった。もとい、はくさんは長野へ帰っていたのだろう。

はくさんは振り返るとゆっくり、ゆっくりと脚を前へ動かし始めた。よく見ると裸足だった。

のぼるはそんなはくさんの後ろ姿をただ見つめているだけだった。

ここからが長かった。

はくさんはゆっくり、ゆっくり、まるで亀の歩みのごとくゆっくりと出口へ向かって歩いていく。

それを見送るのぼる。

ゆっくり、ゆっくり出口のドアを空けるはくさん。

それを見送るのぼる。

それは2時間49分におよぶ長い、長い見送りだった。

その間に俺は展覧会を2周ほどして、スタバでカモミールティー490円を飲んでまったりしたり、トイレへいつたりしていた。

俺が戻った頃にやつとはくさんは出口のドアに手をかけた所だったので、それから約5分ほど二人の世界を外の世界からのぞき込んでいた。

はくさんが出ていくと、のぼるは涙を一粒落とした。
のぼるが泣くのを見るのは3回目だった。

「帰りは外で食べていこうか」

美術館を出るともうあたりは暗くなっていた。これから帰って食事を作るのも面倒だったので、俺はのぼるへそんな提案をしたのだが、

「…ユキのご飯が食べたい。」

「これからだと遅くなっちゃうだろ？」

「…待つ。」

「…素直でよろしい」

第三話

青いカラフル 第3回

く のぼるの創作活動く

美術館へ行った次の日。

のぼるは早速自分のインスピレーションが感化されたのか、何やら描き始めた。

「お昼はいらないな」

「…うん。」

「夕飯は食えよ」

「…うん。」

今日は仕事がかどりそうだな。

いつもはのぼるの相手をしながら仕事を片づけるので時間がかかってしょうがない。まあ、それも楽しみの一つではあるのだけれど、それはのぼるには内緒なのだ。

自分の部屋で仕事を片づけていると、のぼるの作品を作るかすかな音が聞こえてくる。かすかに絵の具の匂いもする。

ああ、心地よいな。

はくさんに会った。

はくさんは悲しい気持ちだった。

愛していた犬が死んでしまったから。

はくさんが悲しい気持ちだったから。
自分も悲しい気持ちになった。

悲しい気持ちを半分に出来たから。
はくさんは少し元気になった。
愛していた犬は帰ってこないけれど。
また絵を描ける気持ちになれた。
忘れないうちにペロの絵を描くよと。
はくさんは言っていたのだと思う。

のぼるはその日のうちに青空を描いた。

「今度はうれしい青だな」

「…うれしいけど、ちょっと寂しい。」

「寂しいけど、温かい青だな」

「…うん、青い。」

「青いカラフル」

はくさんに会った。

はくさんは悲しい気持ちだった。

愛していた犬が死んでしまったから。
はくさんが悲しい気持ちだったから。
自分も悲しい気持ちになった。

悲しい気持ちを半分に出来たから。

はくさんは少し元気になった。
愛していた犬は帰ってこないけれど。
また絵を描ける気持ちになれた。
忘れないうちにペロの絵を描くよと。
はくさんは言っていたのだと思う。

第四話

青いカラフル 第4回

く雨の日く

「…朝だ。」

「うん…」

「…起きれるか。」

「うん…」

ぼんやりとした意識の中、外で雨が降っている音に気がついた。そうか、のぼるはそれで「…起きよう。」ではなく「…起きれるか。」と疑問系だったのか。

「大丈夫、今日はそこまで落ちてない」

「…よかった。」

俺は雨が嫌いだ。いや、苦手と言った方がいいのかな？

人間はずっと自然を意のままにしようとか様々な物を発明して自然の摂理に逆らってきた。

なのに、未だに雨が降ると人々は為すすべもなく傘を差して、服の裾がぬれるのを気にしながら歩かなくてはならない。

未だに人間は自然に翻弄されっぱなしだ。

どうすることも出来ない。

そして、どうすることも出来ないという事が当たり前過ぎて、人々はそれに気付かない。

そのくせ人間は万能だと思っていやがる…

何も出来ないくせに…

俺も…

「…ユキ。」

いきなり名前を呼ばれて驚いた。

いつもの表情でのぼるは俺の顔をのぞき込んでいる。

「大丈夫だって、今朝飯作るから」

「…無理しない方がいい。」

「無理なんかしてねえって」

俺は雨が嫌いだ。いや、好きになれないと言った方がいいかな？
それでも以前に比べればよくなった方だ。

ひどいときはベッドから出られず、大事な仕事がおじゃんになった
事が何度もあったほどだ。

それぐらい俺は雨に翻弄されてきた。

「朝飯できたぞ」

「…うん。」

のぼるはベランダに出て「雨を見ていた」。

「…今日はじつとしてた方がいい。」

「俺に言ってるの？」

「…雨が言ってる。」

「俺に？」

「…うん。」

のぼるは「雨を見る」。

すると雨が教えてくれるのだそうだ。

「…ユキ、大丈夫じゃない。」

「いや、大丈夫だって。朝飯もちゃんと作ったぞ。」

「…」

「朝だってちゃんと起きたし、今洗濯もしたし…ってゆうか今日は午後からクライアントとの打ち合わせがあるんだ。どっちにしろ
出かけなきゃ…」

「行かない方がいい。」

のぼるが人の話を遮るとは珍しい。

そんなに俺はヤヴァい状態なのか？

「でも、今日はどうしても行かなきゃいけないんだ。仕事だからな。」

「…そう、なのか。」

のぼるがうつむく。

そして、天を仰ぐ。

背の高いのぼるが上を向くと、なんだか雲の上まで見わたせそうな気がした。

「…しばらく雨を見よう。」

「朝飯はいいのか？」

「…ユキのため。」

「俺は腹へってるんだけどなあ…」

俺は雨が嫌いだ。でも、今は少し好きかもしれない。

俺が雨の日に心のバランスを崩すのは、他ならぬのぼるの性だ。

のぼるに出会うまでは「雨」にさして思い入れなどなかった。
なのに…

「…聞こえるか。」

「何が？」

「…雨の声。」

「俺には聞こえないって」

「…よく聞いて。」

「聞いているんだけどねえ…」

「…雨が教えてくれる。」

雨はしとしと。降り止まない。

景色がぼんやりとして、頭の中がぼんやりとして、雨の音が聞こえる。

俺は雨が嫌いだ。本当に大嫌いだ。
のぼるはいつもわけのわからない事を言う。

でも、きつとわからない俺にアイツは必死で何かを教えようとして
いるのだろう。

でも、それがわからないから。
教えて欲しいのに…

「…今日はやっぱり、」

「いや、そろそろ行かないと」

「…でも、」

「大丈夫、今聞こえたよ」

「…」

「駅までついてきてくれないか？」

「素直にならないとな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1122h/>

青いカラフル

2010年12月10日22時16分発行